

史料紹介

## 年代記に見る皇帝カール四世のイタリア到来

——ラニエリ・サルド『ピサ年代記』における

一三五四年～一三五五年の記述から——

濱野敦史・津澤真代

### 解題

ここで紹介するのは一四世紀イタリアのラニエリ・サルドの『ピサ年代記』である。サルドは皇帝カール四世のイタリア到来に関心を抱いており、ここではその部分の記述を訳出してたどっていく。底本には、バンティ版を利用した。<sup>①</sup>

ラニエリ・サルドは、ピサのアルノ川左岸にあるキンツイカ地区に住む商人の家に生まれた。出生年は一三二〇年から一三二四年ごろであったと想定され、一三九九年に死去したと考えられる。サルドは一三五〇年以降、一三九八年までさまざまなコムーネの役職に就任した。都市の支配勢力が入れ替わる中で安定的に役職につくことを可能にしたのは、サルドの政治的立場の中立性である。サルドはベルゴリーニ派（『年代記』ではガンパコルタ派と呼ばれている）とラスパンティ派の抗争には関与していない。『年代記』における政治抗争の記述は各党派のいずれにも肩入れすることなく、客観的に綴られている。<sup>②</sup>

年代記に見る皇帝カール四世のイタリア到来（濱野・津澤）

サルドの『年代記』では天地創造とピサの伝説的起源から一三九九年までの長きにわたる時代について記述されているが、一三五四年までの内容はいくつかの年代記を引き写したものにすぎず、サルド本人による記述そのものは一三三四年一月二日から始まっている。この日から、サルドはイタリアにやってきたカール四世の動向をピサの政治状況と絡めながら語っていく。カールはローマでの皇帝戴冠にあたり、往路と復路の両方でピサに滞在し、ピサの政治体制を動揺させることになった。サルドがこの年代記に着手した動機は、まさにこの皇帝来訪にあったとされる。<sup>4)</sup>サルドが皇帝に強い関心を抱いていたことは、皇帝がピサの支配地域から去っていった直後から記述に空白の時期があることからあきらかである。

一三五四年から一三五五年にかけてのカールのイタリア到来に注目した年代記作者は、サルドだけではない。ピサで書かれた作者不詳の年代記<sup>5)</sup>、フィレンツェのマッテオ・ヴィツラーニ<sup>6)</sup>、シエナのドナート・デイ・ネーリ<sup>7)</sup>がカールの動向に紙幅を割いている。ルッカのジョヴァンニ・セルカンビ<sup>8)</sup>ものちにカールの動向を年代記の中で叙述した。こうした年代記作者たちは、すでに死去していたマッテオ・ヴィツラーニを除いて、一三六八年から一三六九年にカールがイタリアを訪れた際の動向についても記録に残している。

同時代人がカールのイタリア訪問から受けた衝撃はきわめて大きかった。実際、ピサとシエナはカールの影響下でそれまでの政権の崩壊を経験し、皇帝の権威に反抗してきたフィレンツェも妥協を強いられた。

こうした同時代の年代記作者による注目にもかかわらず、一九世紀半ばごろまでの歴史家たちがこの問題に寄せてきた関心は低かった。とくにブルクハルトは、カールの行動を「政治的喜劇」にすぎないとの評価を下し、皇帝を無力な存在であるかのように描き出した。<sup>9)</sup>しかし、すでにあげた年代記のいずれかを見れば、ブルクハルトの見解は一面的であることに気づくだろう。

ブルクハルト以降、一三五四年から一三五五年にかけてのカール四世のイタリア到来はともに皇帝側の立場から研究が進められてきた。この問題に先鞭をつけたヴェルンスキーは、カールの行動を逐一再現することに努めた。<sup>10)</sup>近

年では、カールの移動に政策の意図を探るヴィッター<sup>①</sup>、一四世紀の皇帝ならびにドイツ王のイタリア支配政策を検証したパウラーをあげることができる。<sup>②</sup>これに対して、イタリア史の文脈では個々の都市における政治への関心から、皇帝がそこに及ぼした影響を検討する論文がいくつか発表されるにとどまっている。サルドの『年代記』で中心的な話題となるピサとカールの関係についてはマンチネリ<sup>③</sup>とロンザーニ<sup>④</sup>が検討しているが、この問題への一般的な関心は決して高いものではない。

これらの研究はかならずしもカールとピサの関係だけに注目したものではないが、いずれにおいてもサルドの『年代記』がたびたび引用されている。そのことは、この『年代記』がカールとイタリア都市の関係を検討するための史料として古くから高く評価されてきたことを物語っている。本稿でサルドの記述を翻訳し、紹介する理由はそこにある。

一方で、サルドの豊かな描写にもかかわらず、これまで手をつけられていない問題も多く残っている。たとえば、カールがイタリア都市に対して政治的影響力を行使できた背景については、いまだに本格的な検討が加えられていない。ヴェルンスキー以来注目されてきたカールの行動がなぜ可能であったのか、そしてなぜイタリア都市の政治体制がカールの滞在下で崩壊しなければならなかったのかという疑問には現段階で部分的にしか答えられていない。<sup>⑤</sup>従来の研究ではカールの動向と都市政治のいずれか一方を論じようとする傾向があり、今後は両者の問題関心を融合させながら議論を深めていく必要がある。他にも、たとえば入市式といった儀礼の描写など、<sup>⑥</sup>研究の俎上に載せるべき問題は少なくないだろう。

本稿でのサルドの『年代記』の紹介では、上述した一三五四年二月二日から一三五五年六月一五日までの期間を扱うことにする。<sup>⑦</sup>イタリア滞在中、カールは往路と復路の二度ピサに立ち寄り、そこで長い時間を過ごしている。言い換えれば、サルドはカールの行動をもっとも間近で観察していた年代記作者のうちに数えられる。また、サルドはピサ以外のイタリア都市における皇帝の動向についても簡潔に記録しており、カールのイタリア到来の全容につい

でも史料の記述から把握できる。前述したように、サルドはカールの二回目のローマ行きについても『年代記』に描写しているが<sup>18</sup>、そちらの紹介は他日を期することにした。

サルドは執筆にあたって、興味を持った出来事を見聞きすると、それを逐一書き記していったように思われる。その結果、時間がたつてから得た知らせがあつた際には、出来事の結果を記したのちにその詳細が語られたり、出来事の起きた順番が前後したりしている。また、不正確な情報を記しても、それを訂正していない場合も見られる。たとえば、皇帝が発したと述べられているにもかかわらず、その後の記述から実際にはそこにとどまっていたと読める部分がある。こうした不整合は整理の欠如であると考えられるかもしれないが、むしろ臨場感あふれる記録の積み重ねであると思ふべきではないだろうか。言い換えれば、結果を知っている者が後からつけた理屈が介入した可能性は低い。いくつもある年代記の中でもサルドのものをとくに翻訳し、紹介する意義はそこにある。

訳出にあたっては、読者の利便に配慮して、原文の表現を尊重しながらもできるだけ読みやすい日本語に置き換えるよう心掛けた。そのため、原文を逐語訳するようなことはせず、さらに一部の表記は訳者の判断で書き換えた。たとえば、同一人物が異なる綴りで記されていることがあるが、同一人物であることを明示するために同一の表記にしたものがある。また、敬称のミッセルを標準的なメッセルとするなど<sup>19</sup>、一部表記や語順を変更した語もある。語形については、一部の複数形の語は単数形にして表記した一方で、いくつかの複数形のみで使われる語はそのままの形を使った。暦と時間については、記載方式をそのままにして、現代の方式に従った表記に改めることはしなかった。ピサの暦では新年が三月二五日に始まり、そこから一月三十一日までは現在の基準から一年進んだ状態にあることに留意された。

なお、バンティは歴史的事実から写本における表記の解釈にいたるまで多数の注釈を提供しているが、その部分は割愛し、別に用語等についての訳者による注記や補足を「」内に記した。

## 訳文

神の受肉から一三五五年の一月二日、皇帝、すなわちカールの使節がピサに入った。カピターノ「平民組織の長官であるカピターノ・デル・ポボロのことだと思われる」、ポデスタ「司法長官」、アンツイアーニ「ピサの最高評議会」とその他多くの市民たち、また全ての騎士たちと武装を解いたピサの歩兵隊の者たちが使節を出迎えた。国王の使節を努めていたのはヴィチエンツァ司教とプラートのフェンソ殿であり、使節らはファティオ伯の家に滞在した。

使節であるヴィチエンツァ司教は一月三日の水曜日の朝、ピサの執政府に国王の伝言を示した。執政府にはアンツイアーニから命じられた通り、ピサの数人のウォーミニ・サヴィイ「顧問団」が居合わせた。使節が伝えた内容は以下の三つからなる。第一に、ロンバルディア地域に国王が来訪することを示し、その権威を称揚した。また、国王は他のどの都市よりもとりわけピサの都市を愛していることを表明した。第二に、ピサの都市に対し、国王が深い愛情と好意を抱いているため、一人か二人、あるいは数人のピサ市民を皇帝の顧問の中に入れるよう、コムーネに求めた。つまり、国王がトスカーナの事柄に対応する際、その者たちの助言によって自制心を働かせて行動しようと考えているということである。第三の事柄は、皇帝殿が戴冠のためにローマへ行く際、トスカーナを通過しようとしているので、この地を歩き来しようとしていることについてピサ人の意向を知りたいということである。

以上のことは全てのピサ人が知るところとなったので、使節らはピサのドウオーモ「大聖堂」で大評議会が開かれることを望んだ。これは本日のことであり、つまり一三五五年二月五日のことである。ピサの大部分の市民たちと共に、カピターノ殿、ポデスタ殿、さらにアンツイアーニの方々がみな集められた。国王の二人の使節らが到着すると、ピサの執政府の人々の中心で使節らはポデスタに面会し、そこで上述の口上が示された。ピサのポデスタ殿は使節に滞在地に戻るよう言い、そこで使節らの口上に対して回答するつもりであると返答した。このため使節らは立ち去り、滞在地に戻った。

そこで、評議会では六人の市民によって以下のように発言がされた。まずデイーノ・ダ・マルテ殿であったが、結論からすると彼の意見は国王の要求したことをすべきであるというものであった。次にリニエリ・ザンパンテ殿と靴工房の主人レモが発言し、彼らはこの事案をアンツィアーニの人々に委任すべきと、ほぼ同一の見解を示した。グイード・マスカ殿は同様のことを述べ、トメオ殿も同様であった。最終的にグイード殿の案が採用された。アンツィアーニの意向に沿うよう、書簡の処置についてはアンツィアーニが全権を持つというものである。

ローマ人の王であり皇帝であるボヘミアのカールが到来し、一三五五年一月五日「正しくは六日」にミラノで鉄の王冠を授かった。国王はミラノでの戴冠ののち、一三五五年一月一〇日に出立した。

その皇帝殿は一三五五年一月一八日の日曜日、およそ九時課のころに盛大な行列でピサに入った。一本の旗と共にピサ市民らが迎えた。国王一行が獅子門から入市したとき、そこにいたピサ大司教は十字架を掲げていた。皇帝は馬から下り、ピサ大司教のもとに向かった。そして皇帝は全てのピサのポポロ「平民」と、従えていたバローニ「直臣」たちのことを指していると思われる「らと共にピサのドウオーモに入った。そこで王殿は主祭壇に二九金フィオリノを納めた。そして馬に乗り、サンタ・マリア通りに入り、アルノ川沿いにスピーナ橋まで来た。そして橋を渡り、ヌオーヴァ通りを抜けてカルドラリア通りまでサン・マルティノー通りを進んだ。そしてピエロ・デイ・ニコライオ・ガンバコルタの庭で下馬した。そこでピサのアンツィアーニによって皇帝に次のような豪華な寝台が準備された。その寝台には、綿の詰まった高級織物のマットレスと絹地のマットレスがつけられた。さらに上質の羊毛の詰まった緋色の布地のマットレスとビロードで裏打ちされ羽毛の詰まった敷布団と敷布、その上を覆うものとしてのビロードの毛布と金糸が縫い込められた高級布がつき、その寝台は千フィオリノ以上するだろうと見積もられた。二日目になると、ピサのアンツィアーニによってさらに次のようなものが皇帝に与えられた。二〇〇スタイオの小麦粉、四〇〇スタイオの大麦、ギリシア産白ワインを七樽、コルシカ産ワインを七樽、赤ワインを二八樽、二〇頭の若い雌牛、二

頭の家畜、地元産の四〇頭の去勢羊。一つがセリブラのろうそくを一〇〇本、一〇〇リブラのろうそくと小型のろうそくに加え、一〇〇リブラのコンフェット「菓子」、四〇リブラの香料。馬車二五台分のまぐさと馬車四〇台分の燃料用の薪。これら全部で二千フィオリノ以上するだろうと見積もられる。

一月二〇日の月曜日、皇帝殿は部下を通じて布告を出した。それはピサの都市に住む一五歳以上の全ての者は、臣従を誓うために晩課の時刻にドウオーモに行くようにというものであった。これについて多くの市民はドウオーモに向かったが、みな武器を隠し持っていた。皇帝が財務局の井戸付近の道を司教館に向かっていると、ドウオーモの内部では市民らの間から「皇帝万歳！ コンセルヴァトーレ「最高役職者」に死を！」という叫びが上がった。これを聞いて皇帝は引き返し、アンツイアーニの公館に入った。ドウオーモからは多くの市民がコンセルヴァトーレの館に面した広場にやってきて、「コンセルヴァトーレに死を！」と言った。皇帝は市民たちは家に帰るよう、また武装を解くようにと伝令を出した。そして暴動は治められた。

皇帝はバラツツォ「庁舎」に行き、夜の九時までバラツツォにとどまった。そして多くのろうそくに火を灯し、多数の護衛と共に庭園の邸宅、つまり皇帝の滞在地であるガンバコルタの家まで戻った。

一月二一日火曜日、皇帝殿は全ての者はドウオーモで臣従の誓いを立てるよう通達を出した。皇帝自身は武装した全ての部下とピサの歩兵たちと共にドウオーモに行った。そのピサの歩兵たちはすでに皇帝の手に臣従の誓いを立てていた者たちである。これに関して、われわれの代表を務めたのはアルビッツォ・デ・ランフランキ殿、アルビッツォ殿の息子のピエロ殿、ピエロ・ガンバコルタ、コーロ・アリアータであった。彼らは人々の叫びに応えて臣従を続けることを確約し、「皇帝殿万歳！」との声を上げた。この儀式が執り行われると、皆は昼食のために戻ったが、店は閉ざされたままだった。

皇帝殿はこの日、また次のような通達を出した。それは侮辱を受けたあらゆる市民、また不平を述べたいと望む全ての者は、皇帝のもとに来るようにというものである。この出来事に関連する市民の代表者はジョヴァンニ・デル・

トゥルキオ殿であり、パツフェッタ伯、ナプローネ伯とりニエリ・ダミアーノ殿とラスパンテイ派の全ての者が集まり、皇帝のいるパラツツォの前に三〇〇人以上の市民が集まった。これについて、対立する者たちの怒りに対処しに行くため、アンツイアーニによって何人かの市民が選ばれた。その市民たちがパラツツォの中に入り、多くのことが述べ立てられた。最終的に、皇帝はこの出来事に関する解決策を出した。後日、不平のある者は総大司教のもとに行くように皇帝は布告を出した。そのため、ラスパンテイ派とそのとりまきの者たちは総大司教のもとに行き、そこで不平を述べた。この出来事に関連した者たちの不平について、総大司教は嘆願書を作るようにと返答し、そして彼らは嘆願書を提出した。その要求は七つあり、この中には追放者と反逆者を都市に戻すこと、アンツイアーニの選出のための袋〔役職選出用の名札を入れる袋のこと〕を準備することが記され、さらに種々のことが嘆願書には記された。双方の側から一六人招集され、彼らは共同で全てを調整しなければならなかったし、反逆者や追放者を呼び戻さねばならなかった。そして今後四年間使われるように袋を準備し、それぞれの側から半数ずつの名札を袋に入れた。

一月一七日、皇帝殿は総額六万フィオリノのうち三万フィオリノを受け取った。この受領予定の六万フィオリノは三分割して受け取るようになっていたためである。まず三万フィオリノを受け取り、さらにはローマに立つときに一万五千フィオリノ、そしてローマを出発するときの残りの一万五千フィオリノを受領することになっていた。皇帝はルツカとその領地に特権を与え、ピサとルツカのアンツイアーニを皇帝の代官に命じた。神よ、その憐れみにより皇帝が私たちピサ市民との約束を守るよう、皇帝のことを心にお留めください。

二月一日、皇帝殿はフランチェスコ・カストラカーニ殿の三人の息子を騎士に叙任した。この叙任式は皇帝が滞在中にいたサン・ジリオ通りのガンバコルタ家の庭園で執り行われた。その日、九時課を過ぎたころに皇帝殿は多くのパローニたちと共にドウオーモへ行った。助祭の服を身に着け、皇帝のマントを羽織り、頭上に旗を掲げて、高座に上がった。皇帝の右側には、手に抜身の剣を持ったパローニが控え、反対側には手に黄金の玉を持った者が控えた。

皇帝は黄金の玉座に座り、頭に黄金の冠を乗せていた。周囲には全てのバローニたちが座り、反対側には臣下たちが座った。すると、皇帝の前に外衣と帽子を身に着けて、国王「原文では皇帝となっている」であるナポリのアロイツィ「下記のナポリ女王の夫ルイージ・デイ・ターラントのこと」の代理人たちが進んできた。つまり司教ダデイリとプロヴァンスの家令であるファルコ・デイ・サルト殿が国王ルイージの代理として皇帝の手に大いなる臣従を誓い、臣従の口づけをした。皇帝は彼と女王ジョヴァンナに特権を与えた。プロヴァンスの全土を領有することを承認し、同日、全ての人々の前で皇帝の証書局の役人によって公式な証書が作られた。そして皇帝は滞在地へと戻った。

一三五五年二月八日の日曜日の朝、皇帝殿はサン・ピエロ・ア・グラードへ行った。ピサに戻るとき、サン・ドンニノ門で下馬し、そこでアンドレーア・ヴェルナガツロ殿とリニエリ・ガツロ殿、フランチェスコ・ザツチョ殿を騎士に叙任した。そしてピサの多くの騎士、つまり市民である彼らと共にドウオーモへ向かった。

この日曜日、第九課の鐘が鳴り皇帝が戻ってくると、皇妃が獅子門からピサに入った。そして多くの市民たちが運ぶ旗の下で四頭立ての馬車に乗り、サンタ・マリア通りを通り、スピーナ橋を渡ると、ムルチ家を通り過ぎ、カルドラリア通りを通って、サン・ジリオ通りで馬車を下りた。そこに皇帝の居室であるガンバコルタ家のニコライオの家がある。皇妃には千人が同伴し、その連れの中には皇帝のバローニと金拍車の騎士と共に一六人の侍女がいた。皇妃と共に皇帝の姪がいた。

二月一三日の金曜日の三時課ごろ、皇帝殿は多くの供を連れてルッカに行った。そこでルッカ市民から旗の名誉を受けた。皇帝は皆が白と朱色の薄絹をまとった一二〇人のルッカ市民のもとに進んだ。それらの市民らが旗を掲げていた。皇帝がルッカに入ると、カストウルツォ殿のものであった家の城塞に滞在した。その日、ピサの二人のアンツィアーニは、ルッカのレットーリ「行政官」と多くのピサ市民と共に、ルッカの門と城塞の鍵を皇帝に渡しに行った。「陛

下、これがあなたの都市の鍵です」とアンツイアーニは言った。皇帝は鍵を受け取り、代理人として皇帝への献身のために鍵を守り、持つようにとアンツイアーニに言った。その夜、皇帝はルッカに宿泊し、土曜日の三時課ごろにモンテカルロに行き、そこで夜を過ごした。そして日曜日の三時課ごろに出発してグラーマを通り、四旬節前の日曜日の贖宥を得るためにサン・ピエロ・ア・グラーマに行き、そして夕食の時間にピサに戻った。

二月二一日の土曜日、ピエロ・サッコ・ダレッツォ殿が騎士である二人の子息と甥と共にピサに入った。ピエロ殿は武装した息子たちと、彼らの兵士から五〇人ほどを従えていた。サン・マルコ門から多くの市民を引き連れて入り、皇帝のラツパ奏者がピエロ殿一行を先導した。皇帝のもとに行き、アルノ河沿いのグリファイ家の敷地内のトツリ・ヴェルガーテ「直訳すれば「縞模様塔」」で下馬し、そこに滞在した。

そしてこの日、ピサのアンツイアーニは皇妃にさまざまな贈物をした。それは八枚の金糸の高級織物、朱色が四枚と青色が二枚の計六枚の高級織物、八枚の薄琥珀織りと八枚の東方製の織物、絹地が二枚、四枚のキヤムレット、三枚の絹地、ブリュッセル製の布が四枚、テールブルクロスに顔や手や頭に使うような布、ナプキンや非常に繊細なりネンなどであり、それらは二つの長持ちに入っていた。これらの贈物は二千フィオーリノ以上と見積もられる。

二月二四日の火曜日、皇妃様は供を連れてルッカに行った。皇妃は馬車に乗り、旗を掲げてルッカに入り、多くの薄絹を身に着けたルッカの騎士らが武器を携えて出迎えた。ルッカ人らは皇妃に敬意を示し、皇妃は木曜日の夕方まで滞在してピサに戻った。

金曜日の朝、六人のルッカ人が皇帝に贈るビロードと絹織物を持参してピサにやって来た。それらは七〇〇フィオーリノと見積もられた。皇帝はその贈物を受け取り、ルッカ人らに大いに感謝した。

二月二八日の土曜日の九時課のころ、皇帝殿はわずかな供を連れてアンツイアーニの広場へと行った。そこには二〇〇人以上の騎士たちが武装してやって来ており、皇帝は彼らをロマーニャ地方にいる教皇特使のもとに送ることになっていた。この派遣に関してピサのコムーネは皇帝殿の要請に応じて一〇〇人の騎士を送り与えた。この一〇〇人の騎士らにはファヌッチョ・アルチプレーテが同行し、つまり全部で三〇〇人の騎士を皇帝はロマーニャ地方の教皇特使のもとに送った。これらの騎士たちは皇帝が戴冠のためにローマに行くまで、教皇特使の管轄する地域を守らなければならない。

一三五五年三月二日の月曜日の朝、皇帝殿はアンツイアーニと幾人かの市民らを引き連れてピサのドウオーモへ行った。皇帝がオスベダーレ・ヌオーヴォ「直訳すれば「新しい治療院」」に向かつてドウオーモの階段に立っていると、そこにシエナのコムーネから使節と代表者たちがやって来た。使節らはピサのアンツイアーニやそこにいた聴衆の面前で皇帝に臣従の誓いを立てた。そしてシエナの財産と人身を自由意志に基づいて提供することを述べ、その場で公式な証書が作られた。

三月三日の火曜日の朝、皇帝殿はアンツイアーニと多くの市民を引き連れてドウオーモへ行った。そこにはヴォルテラ司教ベルフォルテイ殿と彼の親族がやって来て、皇帝に臣従を誓った。そして、シエナ人らがしたように財産と人身を自由意志に基づいて提供することを述べた。同日の九時課の後、皇帝は三〇〇人の騎士と共にシエナの所有権に属する土地を得るために皇帝のある高貴な臣下を送った。そして三時半ごろ、この者は皇帝の旗を掲げた旗手と共にピサを出立した。皇帝と共に兜飾りをつけた六〇人も市民が門の外まで随伴した。皇帝はこの人々と共に晩課のころにピサに戻った。

カマルリンギ〔財務官〕であるレンモ・ロツソトリニエリ・ダ・サン・ピエトロが一万五千フィオリーノを皇帝に届けた。これは皇帝が受け取る予定である六万フィオリーノを分割したうちの二回目の支払いであり、これによって皇帝は総額のうち四万五千フィオリーノを受け取ったことになる。

八日の日曜日の晩課に、フェラーラ侯フランチェスコがピサに入った。フランチェスコは兜を身に着けた二〇〇人の兵士たちの隊長としてやってきたが、この兵士たちは皇帝がローマに行く際に同行するよう、ミラノから送られた者たちである。皇帝はその日、あるいは翌日に全ての門、つまりサン・マルコ門とレガティア門を閉めさせた。皇帝はこの兵士たちが皇帝の滞在地に寄ることを望んだので、フェラーラ侯は皇帝の旗と蛇の描かれた旗を掲げた兵士たちを引き連れて、皇帝の滞在地を訪れた。そしてサン・ジリオ門を出てサン・マルコ・ア・オルティカイアとプティニアーノのボルゴで下馬し、そこに滞在した。

次の月曜日、皇帝の供の者やミラノから来た者など多くの者のために、ピサの市場〔原文では広場〕でスペルト小麦が一スタイオにつき五四ソルドで、大麦が一スタイオを五二ソルドの価格で一粒残らず全て売り払われた。以前は「スペルト小麦は」一スタイオにつき四四から四六ソルドで売られ、大麦は一スタイオを四二ソルドで売っていたし、小麦は一スタイオ四四ソルドの価格であったのだが。

次の火曜日である三月一〇日、皇帝は臣下とアンツィアーニと数名の市民を連れてピサのドゥオーモへと向かった。ドゥオーモにはサンミアートのコムーネの使節と代表者たちがやって来て、皇帝に臣従を誓い、ピサのポポロの面前で公式な証書が作られた。

木曜日の三時課ごろ、皇帝は臣下を全て引き連れて獅子門の外へ進んだ。ローマで皇帝を戴冠させる予定のオステイアの枢機卿が待つ場所まで、アンツィアーニらは二マイル以上の道のりを皇帝に付き従った。アンツィアーニらが枢機卿のために旗を用意し、その下に枢機卿と皇帝が一緒に入った。そしてセツカメレンダの邸宅に寄つて獅子門まで進んだ。獅子門ではピサ大司教が手に十字架を掲げ、一行の面前に立った。枢機卿と皇帝は馬から下り、十字架に口づけた。そして枢機卿と皇帝は大司教と共に徒歩でマジョーレ教会に向かった。皇帝は枢機卿と共に馬に乗り、アンツィアーニの広場を通り、貴金属工房やボルゴ、ニッキオの塔を通り過ぎ、カプローナ家の邸宅まで進んだ。さらに大司教館まで行き、枢機卿はそこに滞在することとなった。皇帝は自らの滞在地へと戻った。

三月一四日の土曜日、五〇〇人ほどの騎士が、二人の旗手をともなつて、サン・マルコ門から出立した。騎士たちと共に皇帝もいた。この騎士たちはローマへ行くために、シエナへ向かったのだという。

一三五年三月二一日の土曜日、皇帝はドウオーモを訪問したが、アンツィアーニや多数の市民が皇帝に同行した。そこへフィレンツェ人の使者と代表者たちがやつて来て、皇帝に忠誠を誓った。そして常に帝国の支持者であり、決して反抗しないと誓約した。一方で、皇帝がローマへの往路と復路にフィレンツェへ立ち入らないことなど、多くの条件が取り決められた。また、フィレンツェ人は一〇万フィオリノを皇帝に提供するものとされた。すなわち、一〇日以内に三万フィオリノを支払い、四月中に三万フィオリノ、そして残りは六ヶ月以内に納めることになっていた。こうした内容について、四人のフィレンツェ人の使者が合意した。

同日、三時課のころ、皇妃はピサを出発してローマへ向かった。皇妃に従うリッパ伯は千人以上の騎士を連れていた。皇妃たちはサンミニアートへ向かう道を進み、そこに到着すると大きな榮譽をもって迎えられた。同日、皇帝は三時半ごろ、完全武装のパローニたちと全ての部下を率いてサン・マルコ門を出ると、ヴォルテッラ方面への道を進んで、ローマへ向かった。皇帝はヴォルテッラで宿泊した後、月曜日にシエナへ入ったが、その際に壮麗な行列をして、

歓迎を受けた。ピサからは、皇帝の命令を受けて、三人の市民がそこに向かっていた。その三人とは、パツフェッタ・ダ・モンテスクダイオ伯、バルトロメオ・ガンバコルタ、ヴァンスツチヨ・ボツテイチェツラである。さらにアンツイアーニは、この三人に加えて、別の三人の使者を任命し、一二リラと馬四頭を提供した。追加されたのは、リニエリ・ガツロ殿、フランチェスコ・ダミアノ殿、トット・アイユータミクリストであった。この使者たちは、三月二五日の水曜日に出発した。

ピサにはアウグスブルク司教がとどまった。この司教はピサとルツカのカピターノ・ジエネラレ「統括長官」であり、武装した者たちはみな、その手に受け入れられて誓約した。この司教は、特権として皇帝と同一の権限を保持していた。神よ、彼が平和と平穩をもたらすように、恩寵をたまわりますように。

皇帝がヴォルテツラに入ったのは、日曜日の夜だった。ピサを出発して、夜、そこに到着すると、大きな榮譽を受け、連れてくる集団と共にそこで夜を越した。月曜日の朝、皇帝は馬に乗ると、シエナへ向かい、夕方から夜にかけてそこに到着した。この都市に入るときに、皇帝の前にはおよそ七〇人の薄絹を身に着けた者たちで、旗と武器を持ち、薄絹と旗を引き裂いて、皇帝の到着を盛大に祝った。それから皇帝はジョヴァンニ・ダンジョリーノ・ボツトーニ・デ・サリンベーニの館へ休息しに行き、そこに宿泊した。

次の火曜日、皇帝は布告を出して、全ての者がドウオーモへ行き、皇帝の手に受け入れられて誠実宣誓を行うように求めた。そこでシエナ人たちは、朝、皇帝がドウオーモへ行く前に、贈物として、ろうそく、コンフェット、大麦、魚、ワインなどを届けた。皇帝殿はこの贈物を受け取ると、徒歩のパローニたちをともなうてドウオーモへ赴き、そこでミサに参列した。そして、シエナ人の代表者たちから宣誓を受けた。その後、皇帝が滞在する館に戻るときに、トロメイ家の者たちがシエナの他のジェンティルウォーミニ「旧支配者層」と一緒になって反乱を起こし、「皇帝万歳、ノーヴェ「九人委員会」体制に終焉を！」との声を上げた。このように叫ぶと、この者たちは、ノーヴェの庁舎へ行っ

た。さらにカピターノ・デッラ・グエッラ「軍事長官」の箱「シエナのドナート・デイ・ネーリの『年代記』では「家」を襲撃したことになる」を略奪し、カピターノを追い出した。

皇帝は滞在する館に戻ると、布告を出して、全ての者が武装を解き、帰宅するよう求めた。多大な労苦を払った後、それは実現された。ノーヴェエはそれを見て、シエナの門と鎖の鍵を手に取り、皇帝のもとへ持参した。その後、九時課のころ、また別の反乱が起こり、「皇帝万歳、ノーヴェエ体制に終焉を！」という声が上がった。反乱を起こした者たちはノーヴェエの庁舎へ向かったため、ノーヴェエは恐れをなして逃げ出した。そこでその集団は箱「ドナート・デイ・ネーリによれば、ノーヴェエ選出用の名札が入った箱のこと」を奪い、それをロバの後ろにくくりつけ、シエナの街に火をつけて回った。その後、同日中にこの反乱は収束した。

水曜日の朝、皇帝がジョヴァンニ・ダンジョリーノ・ボットーニの館に滞在していると、シエナの人々が大勢やってきて、皇帝にノーヴェエがいた庁舎に滞在するようにお願いした。皇帝は願いを聞き入れ、枝の主日までそこにとどまった。枝の主日の三時課のころ、皇帝殿はシエナを出発し、戴冠式を行うために都市ローマへと向かった。シエナを立つ前に、皇帝はフィレンツェ人から四万フィオリノを受け取った上で、さらに騎兵を二〇〇人要求した。フィレンツェ人は皇帝の護衛のためにその騎兵を派遣した。また皇帝は、われわれピサ人に二〇〇人の歩兵を要求した。この命令は望み通りに実行された。

皇帝はシエナに代官としてプラハ大司教を残した。その顧問とされたのは、フランチェスコ・カストラカーニ殿、コルトーナのシニョーレ「支配者」、ピエロ・ティルラート殿、そしてその甥であった。また多数の騎士と歩兵もとどまった。前述の司教は庁舎に滞在したが、そこはもともとノーヴェエとカピターノ・デッラ・グエッラがいた場所であった。

枝の主日「三月二九日」、人々が食事を終えたころ、ピサでまた騒動が起こった。そのため、あらゆる者が自宅へ戻っ

たが、武器を手を取った者も、そうでない者もいた。皇帝のカピターノが部下を全て武装させると、騒動は治まった。その後、夕方、ふたたび騒動が発生し、皇帝のカピターノは部下を武装させた。そして、このカピターノは騒動を起こした者をシエナに追放した。追放されたのは、ジョヴァンニ・ラツジョ、フランチェスコ・ドルセツコであった。というのも、この二人はガンバコルタ家の館を襲撃したのである。また、ジョヴァンニとカロツチョ・コンフォルトも追放された。カロツチョは居酒屋の店主であったが、騒動に加わっていた。他に追放されたのは、フランチェスコ・ザツチョ殿、グイード・デイ・ナプローネ・ダ・ドノラティコ、トンマーズ・ダ・マツサ、バルトロメオ・ガンバコルタであった。バルトロメオ・ガンバコルタが追放されたのは、カピターノの甥に侮辱の言葉を浴びせたためである。カピターノは以上のような処分を行った。

皇帝殿がローマに到着したのは聖木曜日「四月二日」であり、その日からサン・ジョヴァンニ・ラテラノに逗留した。復活祭「四月五日」の日曜日の朝、皇帝は盛大な行進をして、サン・ピエロ「ピエトロ」教会に行つた。そこには式服を身に着けたオステイアの枢機卿がおり、復活祭の礼拝をおごそかに行つた。礼拝は正午までかかった。そして皇帝殿は聖体を拝領した。以上の礼拝が終了すると、皇帝の戴冠式が始まった。この儀式は厳肅に執り行われた。盛大な祝典が開かれて、前述した枢機卿殿が皇帝に冠を授けた。この皇帝カール殿は、冠を授かると、その部下の中から多くの者を騎士に叙任した。多くのトスカーナ人も騎士となった。ピサからは、パツフェッタ・ダ・ドノラティコ伯とジョヴァンニ・パンチャ殿が騎士に叙任された。

皇帝殿は冠を授けられ、騎士を叙任すると、馬に乗り、食事をするためにサン・ジョヴァンニ・ラテラノへ赴き、その後、サン・ロレンツォに行つて、宿泊した。

復活祭翌日の月曜日、つまり四月六日、皇帝はサン・ロレンツォを立ち、部下をともなつて、ティヴォリへ向かつ

た。そこはローマの外で、一六マイル離れている。皇帝はそこに三日間滞在して、自身が眞の皇帝であるということに、異議を唱えようとする者がいないことを確認した。それが済むと、皇帝は出発し、ペルージャへ向かう道を進んだ。しかし、ペルージャ人は皇帝を立ち入らせようとはしなかった。そのため皇帝はモンテプルチャーノに入り、そこに数日滞在した。その後、皇帝はモンテプルチャーノから出発したが、そこに代官としてヴィチエンツァ司教をその部下と共に残した。さらに、そこでおよそ六〇人のシエナ人を騎士に叙任した。

皇帝は四月一五日にシエナに入り、一三五六年五月四日までそこに滞在した。五月四日、月曜日、皇帝はシエナから出発した。皇帝は代官として、そしてシエナとその支配下にある集落、コンタードのシニョーレとして、きょうだいであるアクイレア「アクイレイア」総大司教殿を残した。

皇帝がシエナを離れる前に、「ピサでは」評議会が開かれた。それは火曜日の夜、夜の二時のことであつた。評議会は次のような経緯で開かれた。ラスバンティ派が全員で、皇帝の意向を受けてピサにいるカピターノのもとへ行つた。そして、自分たちはセル・ベニンカーザよりも皇帝に貢献できると申し立てた。この者たちによれば、セル・ベニンカーザはモンテフィアスコネへ行つて皇帝に面会し、「そのようなことをお望みであるならば、次のようになさいませ。ヴァルター殿をアンツィアーニのもとに派遣し、プリオーレ「アンツィアーニの筆頭」の鐘を鳴らさせる」「特定の鐘の鳴らし方でアンツィアーニを召集させる」のです。そして、どのような事態が起こるかをご覧ください」と進言したのだという。

そこでカピターノは、アンツィアーニのもとに甥のヴァルターを遣わした。ヴァルターは、そこにいたピエロ・ガソルタにバルラメント「評議会」の鐘を鳴らすように告げた。ピエロは鐘を鳴らしたが、やってきたのは、ゲラルド・ファジュオーロ殿と鍵屋のモーネだけであつた。そこで上述のヴァルターは、ピサが皇帝の意に完全に従うことに同意するかとたずねた。その者たちは、同意すると答えた。その後、マジノー・アイユータミクリストとチェツ

コ・アリアータがヴァルターに「ピエロ・ガンバコルタに許可を求めて、あなたが鐘を鳴らしに行くようにしてください」と言った。そのようにことが運ばれ、鐘が鳴らされると、パルラメントには、リニエリ・ダンミアアーノ殿、ピエロ・ダ・ヴィーコ殿、ロレンツォ・ロッセルミーノ、フランチェスコ・ボッティチェッラ、フランチェスコ・ダ・サンカシャーノ、バルトロメオ・マルビリーオ、コンテ・アイユータミクリスト、パオロ・ダ・ティティニャーノ、コルドバ革商のブオニンセーニャがやってきた。そこでヴァルター殿は、ピサが皇帝の意に完全に従うことに同意するかとたずねた。全員が同意すると答え、自分たちはガンバコルタ家の者とその追従者たちよりも貢献できると主張した。ヴァルターは帰宅して、全てをカピターノに報告した。

水曜日の朝、一三五六年四月二二日、アンツィアーニは四〇〇人以上のピサの有力者からなる評議会の開催を要求した。そして有力者たちがポポロの庁舎にいと、アウグスブルク司教がやってきた。この司教は皇帝のためにピサとルツカのカピターノ・ジェネラーレを務めており、ピサとルツカは皇帝殿にすでに差し出されているとそこで主張した。というのも、この二つの都市は財産と人身を自由意志に基づいて皇帝のものとしており、人々はそのことに同意しているからだとされた。すると、即座に立ち上がったチェッコ・アリアータが壇に登り、ピサとルツカが皇帝の意に完全に従うことを望むと述べた。さらに、皇帝がピサとルツカの絶対的なシニョーレになることを希望するとも言った。さらにロドヴィーコ・デッラ・ロツカ殿が進み出て、同様の主張をし、さらに聖なる冠を戴く皇帝がルツカをピサの従属下に置くことを望んでいたと付け加えた。次に進み出たのはフランチェスコ・ガンバコルタで、その次にはネーリ・パーバが続いたが、二人も同様の発言をした。さらにジョヴァンニ・デッレ・ブラケ、ジョヴァンニ・グラツツ、プロヴィーノ殿が進み出たが、みな同様の趣旨を述べた。次に立ち上がったゴスタンティーノ・サルドは、その前の発言者に反論した。その内容は、皇帝がコムーネに施した恩恵は評価するが、皇帝がシニョーレであることは気に入らないというものであった。さらにゴスタンティーノは、決議について、賛否を述べる方法にして、起立と

着席で決める方法にしないことを提案した。その提案はまったく受け入れられなかった。決議が行われ、その結果、ピサは自由意志で皇帝に差し出されるものとされた。これを受けて、カピターノはその場で四人の代表者を選び、この代表者たちがシエナへ行つて、ピサを皇帝に献上することになった。代表者は以下の者たちであった。すなわち、ロドヴィーコ・デツラ・ロツカ殿、コーロ・アリアータ、ロット・ガンバコルタ、ネーリ・パーパであった。さらに公証人としてガッド・サツソも選ばれた。

この者たちは代表者の任務を帯びてシエナへ行き、皇帝に自由意志で自分たちをゆだねた。皇帝は祝いの場を設けてこれを受け入れ、それについての証書を作成させた。

皇帝殿はシエナを出発すると、皇妃をともなつてサンミニアートにやつてきて宿泊した。それは火曜日、五月五日のことであつた。皇帝と皇妃はそこで夜を過ごした。二人は水曜日にサンミニアートで食事を済ませると出立して、ピサへ向かつた。ピサに入つたのは五月六日で、晩課のころ、皇帝と皇妃は道を進んでスピーナ橋へ向かい、アルノ川沿いにトツリ・ヴェルゲーテを通過した。そしてサンタ・マリア通りに入つてドウオーモへ行き、それからアンツイアーニの庁舎に向かい、そこに滞在した。皇妃はその建物の中に寝室を構えたが、そこはもともとアンツイアーニがいた場所であつた。そのため、アンツイアーニはカピターノ・デル・ポポロがいた庁舎に移動した。このとき、三月と四月にアンツイアーニであつた者たちがまだその職にとどまつていた。皇帝は、自分が戻ってくるまで、アンツイアーニが別の者になることを望まなかつたので、アンツイアーニはそのままだったのである。そして、このアンツイアーニはカピターノ・デル・ポポロのものであつた庁舎に滞在することになった。

皇帝はピサに入る前に、その外で騎士叙任を行つた。ピサでわれわれのカピターノを務めたことがあるフォルトゥーナート・ダ・トーデイ殿は、サン・サヴィーノで騎士に叙任された。これは皇帝が戻ってくる途中のことであつた。サン・マルコ門に到着すると、皇帝はさらに騎士を叙任した。叙任されたのは、伯であつたりニエリ・ダ・ドノラティコ殿、

グアイド・デイ・メッセール・ナポレオーネ殿、そしてナポレオーネ・ダ・ドノラティコ殿であった。その後、皇帝はピサに入ったが、これについてはすでに述べた。

皇帝と共に、プレフェット・ダ・ヴィーコ殿とヴァラリアーノ・カストラカーニ殿もピサに入った。

五月七日の木曜日、アンツイアーニは全員で皇帝のもとへ行つたが、そこへピサの鍵と塔の鍵を持っていった。その塔には貨幣が納められており、そこにある箱にはグロッソ貨、フィオーリーノ貨、そしてその他の硬貨が入っていた。その箱と公金を収める部屋には、ルツカ人が支払うことになっていた現金に加えて、グラノー貨もあり、合計で五万五千フィオーリーノ以上があつたと言われている。金曜日、ラスパンティ派は行動を起こし、アンツイアーニの役職を手に入れると主張した。すると、ガンバコルタ派も反応し、そのようなことはできないと反論した。結局、和解が成立し、全ての役職を折半することになった。双方からそれぞれ四人の者が選ばれ、その者たちが袋を作り直し、さらにピサの他の役職についても改めることになった。

土曜日の朝、リミニのマラテスタ殿がピサに入り、リニエリ伯のものであつた館に滞在することになった。その日、晩課のころ、フィレンツェのニコラ・デツリ・アツチャイウォーリ殿がやつてきた。この人物はナポリ王、ルイージの大家令を務めていた。アツチャイウォーリ殿はロット・ガンバコルタの庭園にある館に行つた。この土曜日、晩課のころ、皇帝殿は布告を出し、ピサの都市、コンタード、支配地域のいかなる者も決して武器を持ち歩いてはならないとした。これは他人を攻撃するためではなく、身を守るためでも同じで、アンツイアーニ、書記官、その部下の公証人にも適用され、皇帝あるいは総大司教から武器の携帯を許された者も例外とはされなかつた。違反の場合には、生命および人身で処罰されることになつていた。それゆえ、あらゆる者が武器を置いた。

日曜日の夕方、ピサにフランチェスコ・カストラカーニ殿がやってきて、カツリウォーラにあるピエロ・ダ・マツサの庭園に滞在した。

五月一八日の月曜日、九時課のころ、ピサじゅうである噂が広まった。それによると、フランチェスコ・カストラカーニ殿が歩兵を呼び寄せ、反乱を起こそうとしているとのことであった。それゆえ、人々はみな自宅へ戻り、当地全体が不安にさいなまれた。皇帝がアンツィアーニに使いを送ると、この者たちは、歩兵がやってくるに聞いた、と言った。このため、皇帝はフランチェスコ殿、アツリーゴ殿、そしてヴァレラーノに使いを出した。その直後に、アツリーゴ殿とヴァレラーノは立ち去っていった。フランチェスコ殿は滞在する館には家令、そして皇帝のカピターノが向かったが、こちらもすでに引き払った後であった。フランチェスコ殿はキアッソ・パリーレ通りを抜けると、スピーナ橋を渡り、パルラツシヨ門から出ていった。この夜遅く、そのフランチェスコ殿、アツリーゴ殿、ヴァレラーノ殿、そしてフランチェスコ殿の子息はサンタ・マリア・デル・ジューデイチエに到着した。四人はそこで夕食をとり、宿泊した。火曜日の朝、明け方、この者たちは馬に乗ると、ルツカへの道を進んだ。馬を進めると、公の館にたどり着いた。この館はルツカへ向かう道の途中にあった。アツリーゴ・カストラカーニ殿は、その館をなぐらぐ訪れていないので、そこに行きたいとフランチェスコ殿に言った。そのため、この者たちは四人とも下馬した。館の中で、アツリーゴ殿は剣を手にすると、フランチェスコ殿に斬りかかり、まず脚、そして次に頭を攻撃した。ヴァレラーノもそれにならった。こうして、フランチェスコ殿は殺害された。フランチェスコ殿の子息は父親を救おうとしたが、傷を負い、瀕死の状態に陥った。そこにはフランチェスコ・カストラカーニ殿の義理のきょうだいないたが、やはり殺された。アツリーゴ殿とヴァレラーノはフランチェスコ殿の馬を奪い、二人ともロンバルディアへの道を進んでいった。

一三五六年五月二〇日の水曜日、火曜日から水曜日にかけての夜、五時ごろ、ポボロの館で火災が発生した。そこにはピサのコムーネの軍事物資があったが、火の勢いが激しく、手の施しようがなかった。そして早朝の鐘が鳴るま

では、あらゆるものが火に飲まれた。この火事の原因は、皇帝の部下たちがそこにいて、床の上で火をおこしたことにあった。そのために、下の床が焼け、全てが崩れ落ちてしまったのである。そこにあった軍事物資の中には、コムーネが所有していた千台のバレストラ「弩弓」、その矢が入った箱、腹当て、よいなど、軍事物資に含まれるあらゆるものがあつた。バレストラの中には、一台で一〇〇フィオリーノもするものが一〇台含まれていた。それは大型の巻き上げ式バレストラであつた。さらに矢を一度に三本飛ばすバレストラもあつた。このバレストラは、われわれがモンテカティーニを獲得したときに、そこで手に入れたものであつた。

その水曜日に先立つ火曜日、皇帝はルツカに指揮官とその部下を派遣し、この者たちは城塞に入った。そこにいた者たちは城塞の外に出され、われわれの歩兵と騎兵、さらに城塞に付属する塔、城壁、砦にいた者たちもそこから追ひ出された。皇帝の手の者は城塞を自分たちのものにして、ピサ人は誰もそこに入ることができなかった。このため、その日、皇帝はルツカをわれわれから取り上げたのだという噂が広まつた。これに対して大規模な反乱が起こり、多大な被害が生じることになつた。

この水曜日、つまり五月二〇日、九時課から晩課の間にピサで反乱が発生し、「ポポロ万歳！」との声が上がつた。そして「皇帝に死を！」と叫ぶ者があらわれ、ヌオーヴォ橋では皇帝側に四〇人以上の死者が出て、六〇頭以上の馬が奪われた。ピサのポポロは武器を取り、ガンバコルタ家の館に向かつた者もいれば、パツフェツタ殿と行動をとるにした者もいた。こうして五〇〇人以上の人が武装してガンバコルタ家の館に集まっていると、ジョヴァンニ・ラッジョが騎馬であらわれた。ロツジャにいた者たちはそれがドイツ人だと思ひこみ、後ろから襲いかかると、槍で一撃を食らわせて殺害してしまつた。

橋とニツキオの塔には数多くの人々がやつてきていた。パツフェツタ殿とロドヴィーコ殿は六〇〇人以上の者を引き連れていた。皇帝のカピターノは、皇帝のラツパ手と驚の描かれた皇帝の軍旗を従えて、「皇帝万歳、裏切り者に死を！」と叫んだ。ヴェツキオ橋で双方が対峙すると、投槍、バレストラ、そして投石の応酬が始まつた。この小競

り合いで、ヴァンニ・ダツピアーノは槍を口に受けて死亡した。そこでは他にも死者が出ており、ヴァンニ・ダツピアーノの他にも、無名の者が二人か三人死んだ。

橋での戦闘が苛烈な上に、そこからキンツイカには柵が設けられていたため、誰もそこを越えることはできなかった。それゆえ、ロドヴィーコ殿はニッキオの者たちと皇帝の騎士たちを率いて、スピーナ橋に迂回してキンツイカへいたり、ガンバコルタ家の館へ行つた。人々はそれを目にする、みな散り散りに逃げ去つた。そして間もなく、ガンバコルタ家の館は略奪にあい、放火された。被害にあつたのは、フランチェスコ、バルトロメオ、ニッコラーイオ、ロット・ガンバコルタの館であつた。ピエロの館は、バッチヨメオ・デイ・ラーポが見逃してやつたので、手つかずのまま残された。というのも、バッチヨメオの館はその横に立っていたのである。

反乱があつた当日に、皇帝によつて、フランチェスコ、ロット、バルトロメオ、ピエロ、そしてゲラルド・ガンバコルタは全て捕らえられ、身柄を拘束された。また、サルヴィ、フランチェスコ・ドルセツロ、ネルツチヨ、マルコ・デイ・メーオが捕らえられた。さらにアルビッツィオ・ランフランキ殿、グエルフォ・グアルテロット殿、ロツソ・ブザツケリーニ殿が身柄を拘束された。ドイツ人たちはヌオーヴォ橋で甚大な損害を被つたため、ピエロ・デイ・サルムーロの館を手始めに、ピエロの館、つまりピエロ・デイ・メツセル・オピーゾの息子たちの館まで略奪し、それぞれが受けた損害を取り返そうとした。

翌木曜日、新しいレットトリーとして、ジョヴァンニ・ダツミアアーノ殿とフランチェスコ・グリフォがルツカへ向かつた。二人がルツカに到着すると、ドイツ人たちが皇帝のために城塞内に駆けつけてきて、中に入ってもらいたくないと言つた。この知らせはピサに伝わり、ルツカは売られたのだとされた。このため、アンツィアーニは晩課のころに布告を出し、キンツイカ地区の者は全て、ポポロも騎士も、ルツカへ向かうよう命じた。夜、キンツイカの者たちがルツカの草地にいます、そこにヴァルデイセルキオとピエイモンティの部隊がやつてきた。金曜日の朝、サン・ピエロ門に集結した我が方は二千人以上を数えた。手短に言えば、それでもドイツ人たちは開門しようとはしなかつた。金曜

日、ポンテ地区と全コンタードの部隊がやってきた。その中にはピエロ・デイ・メッセル・アルビッツォ殿、ロレンツォ・デイ・ロッセルミーノがいた。この部隊が到着する前に、ルッカ人は人員を増強させていた。噂によると、ルッカ人を支配下に置いた皇帝とその指揮官のもとから連れて来たのだという。ドイツ人は当地のあらゆる門と砦を手中に収めており、すでにそこにルッカ人の歩兵を多数配置してあった上、サン・ミケーレ広場を確保していた。しかし、皇帝の指揮官は事態を認識すると、ピエロ殿、ロレンツォ、そしてピサのポポロを中に入れた。金曜日にこの者たちは城塞に入り、ルッカの全ての砦、塔、城壁を確保した。皇帝側の手勢はみな退去し、ピサへやって来た。

金曜日遅く、ピサのポポロは、歩兵と騎馬からなるわれわれの軍勢をとまなつて、城塞を後にすると、サン・ミケーレ広場へ向かった。これに対してルッカ人が立ちはだかり、激しい戦闘の結果、多数の死傷者が出た。それでも、ルッカ人はその夜から土曜日の朝までそこに踏みとどまった。土曜日の午前中、ルッカ人はレットトリーに使いをやって、慈悲をかけてもらえるよう求め、略奪が行われず、その地が自分たちのものとされるように要請した。こうして、ピエロ殿とロレンツォ、そしてレットトリーはルッカの城塞から外に出ると、都市の城門にある砦を確保した。そして、その地の秩序を回復させると、ピサのポポロを全て送り出した。

皇帝はフランチェスコ、ロット、そしてバルトロメオ・ガンバコルタを拷問にかけた。さらにネーリ・パーバ、ジョヴァンニ・デッレ・ブラケ、ウーゴ・デイ・グイット、チェッコ・チンクイーノを拷問して、手早く自白を引き出した。それによるとこの者たちは何人かの市民たちを裏切つて殺害させたが、これには数名のフィレンツェ人が関与していたという。自白は他にもあったが、それは聞くにたえないものであった。これを受けて、火曜日に皇帝は布告を出し、何が起ころうとも、誰も外出してはならないとした。さらに皇帝は自身の手勢を武装させた。

一三五六年五月二六日の火曜日、皇帝は、馬に乗つて武装した手勢を派遣し、それと一緒に上で列挙した者を連れ出して、七人のピサ市民を斬首させた。皇帝の手勢は命令を受けてサンタ・マリア通りを抜けると、ダツミアーノ家の館の前を通過して、アンツィアーニ広場にたどり着いた。そしてアンツィアーニの庁舎の階段下にある低い壁の上

に行くと、刑の宣告が行われ、この者たちは首をはねられた。さらに布告が発せられ、三日間は誰も斬首された者たちに触れてはならないとされた。それゆえ、遺体は一時間にわたって広場に放置され、望めば誰でもそれを眺めることができた。その後、市民たちは皇帝のもとに恩赦を求めに行き、そこから遺体を移すよう嘆願した。皇帝は恩赦を与え、遺体を動かすことを許した。四人がサン・フランチェスコ教会に運ばれ、三人はサンタ・カテリーナ教会に運び込まれた。つまり、バルトロメオ・ガンバコルタ、ネーリ・パーバ、フランチェスコ、ロットはサン・フランチェスコ教会に、そしてジョヴァンニ、ウーゴ、チェッコはサンタ・カテリーナ教会に運ばれた。神よ、この者たちをお許しください。そして、聖なる平和が訪れますように。

それ以外の市民たちは放逐された。ピエロおよびゲラルド・ガンバコルタはファマゴスタに、アルビッツォ・ランフランキ殿はパドヴァに、ゲエルフォ殿はマントヴァに、ロツソ・ブザツケリーニ殿はモンテフォスコリに追放された。それ以外にも多くの市民が同様の憂き目にあつたが、その名前を記すのは冗長というものだろう。

皇帝は五月二七日の水曜日にピサを離れた。それは九時課のころで、皇帝はピエトラサンタへ向かった。そこには皇妃がいた。皇帝は自身の代官としてピサのアンツィアーニを残し、ピエトラサンタの上にある城塞に滞在した。

一三五六年五月二九日の金曜日、ピサのアンツィアーニが口頭で選ばれた。任期は三ヶ月、つまり六月、七月、そして八月であつた。アンツィアーニに選ばれたのは以下の者たちである。ポンテからは、規定に従つて、プリオーレのバルトロメオ・イスカルソ殿、商人のファティオ・イスカッチェーリ、靴屋のベネデット。メッツォからは、規定に従つて、ベネデット・デイ・プッチョ、商人のシモーネ・デイ・ランベルトウッチョ、ピエロ・デイ・フェツランド。フォーリ・デイ・ポルタからは、規定に従つて、プリオーレのコーロ・アリアータ、商人のアンドレーア・マルゾリーノ、ブォーナジュンタ・ミカーリ。キンツィカからは、ピエロ・デッラニエツロ、トンマーズ・ダ・マッサ、アンドレーア・ファローポ。そしてアンツィアーニの書記官として、マッテオ・デイ・ブォナイユート。

一三五六年五月二六日、総大司教はシエナを去った。シエナは混乱を極めた状態で放置された。総大司教はピサへ向かうと、五月三一日にそこに入り、聖堂参事会員の館に落ち着いた。その後、六月二日、総大司教は馬に乗ってピエトラサンタへ向かい、皇帝のもとに滞在することになった。

皇帝を数人のピサ人が訪ねていった。それはロドヴィーコ・デッラ・ロッカ殿、ピエロ・デイ・メッセル・アルピッツォ殿らの市民であった。その場において、皇帝は被った損害について不満を表明し、馬や装備への賠償として、八千フィオリーノを要求した。さらに皇帝は、ピサで発生した事態のために手元に必要な騎兵が確保されていないと述べ、それらを提供するように求めた。その後、上述の者たちはピサへ引き返した。

水曜日、その問題について会議が開かれ、少数のウォーミニ・サヴィイにゆだねられることになった。この者たちは損害と費用に対して一万三千フィオリーノを皇帝へ支払うことにした。市民の何人かが呼ばれ、その一万三千フィオリーノを貸与する意志があるかたずねられた。この貸与からは五パーセント「の利子」が得られ、鉾山と塩を除く、ピサの収入の半分が貸与者に割り当てられることになっていた。それは返済が終わるまで続くものとされた。その金は用立てられ、聖体の祝日「六月四日」に支払われた。さらに皇妃も七千フィオリーノを要求したとのことであった。皇妃はこの金額をフィレンツェ人に与えており、その分を望んだのだという。これについても使者が派遣され、同じように取り決められた。

一三五六年六月五日の金曜日、ピエトラサンタに滞在中の皇帝に一万三千フィオリーノが届けられた。これを持っていったのは、リニエリ・コーロ、リグルコ・リグルチらの市民であった。

六月九日、火曜日、ピサのアンツイアーニは数名のウォーミニ・サヴィイと共同で、一〇名の者を追放した。追放者たちは、ピサ、ルッカ、そしてそのコンタードや支配地域から四〇マイル以内に入ってはならないとされた。追放

者の名前は以下の通りである。聖堂参事会員のオッド・マカイオーネ殿、グアルテロット・デ・ランフランキ殿、シモーネ・デル・ヴェルデ、メッセール・ピエロおよびネルツォ・パーバ、グイード・マスカ殿、ガッド・デイ・メツセール・オビッツォ・ダ・フチエツキオ、ブオナコルソ・ブオンコンテ、ピエロ・ブリア殿、ナータのセル・ピエロ・デイ・サルムーロ。アンツイアーニの命令で、ピサからおよそ二〇〇人も多数のバレストラ兵とそれに加えて歩兵が出発してルツカへ行き、次にルツカからモンテスーリへ向かった。というのも、そこでアルティーノ・デイ・メツセール・カストウルツォ・カストラカーニが合流したからである。さらに皇帝自身が、ピエトラサンタから馬に乗ってそこにやってきた。皇帝は完全武装しており、手勢をともなっていた。六月九日の火曜日、アルティーノは皇帝と講和を結んだ。アルティーノは身柄を確保され、ピサに連行されると、牢獄の奥に閉じ込められた。さらに城塞が略奪された。というのも、そこには多く物品がピエトラサンタのハンガリー人たちよって持ち込まれていたのである。城塞は、基礎にいたるまで、完全に破壊された。

六月一日の木曜日、皇帝はピエトラサンタを離れ、多くの騎士を連れて帰国の途についた。皇帝はセラザーナ「サルザーナ」への道を進み、総大司教もそれに同行した。

六月一三日の土曜日、ピエトラサンタにいる皇帝のもとをパツフェッタ殿とフランチェスコ・ザツチヨ殿、そしてコロ・デル・モスカラの市民が訪れた。この者たちは皇帝に七千フィオリノを持っていった。皇帝はこの七千フィオリノをロイ・デイ・ペーベから受け取る事になっていた。そしてわれわれはこの金を、サン・ジョヴァンニの祝祭のために、フィレンツェ人たちに払うものとされていた。その金が皇帝の手に渡ったのが、この日であった。

六月一四日の日曜日、九時課のころ、皇帝は出発するために馬に乗った。そして馬に乗ったまま、ウーゴ・ダ・モンテスクダイオ殿を騎士に叙任した。それが済むと、ピエトラサンタを立って、セラザーナへの道を進み、本拠地へ

向かった。神よ、皇帝がわれわれにもたらしたような利益を、皇帝にもたまわりますように。

六月一五日の月曜日、皇帝のカピターノは、カストゥルツチョ・カストラカーニ殿の息子、アルティーノの首をはねさせた。その理由は、ルツカに害をなすようなことを言ったからというものであった。アルティーノは草地で斬首され、サン・フランチェスコ教会の一族の墓に葬られた。

註

- (1) Ranieri Sardo, *Cronaca di Pisa*, a cura di Ottavio Banfi, Roma, 1963. この年代記は、バンティ以前にもボナイーニによって編集されている。Ranieri Sardo, *Cronaca pisana*, «Archivio storico italiano», 6 (1845), parte seconda, pp. 75-244.
- (2) ラニエリ・サルティの人物については、バンティによる序文に従った。Ottavio Banfi, *Introduzione*, in Sardo, *Cronaca di Pisa*, pp. XLVIII-LVIII.
- (3) 一三五四年以前の部分の構成については、バンティの序文を参照。Ibid., pp. VII-XXI.
- (4) サルトは戴冠以前からカールを皇帝と呼んでゐる。
- (5) *Cronica di Pisa dal ms. Roncioni 338 dell'Archivio di Stato di Pisa*, Edizione e commento, a cura di Cecilia Iannella, Roma, 2005.
- (6) Matteo Villani, *Cronica. Con la continuazione di Filippo Villani*, a cura di Giuseppe Porta, 2 voll., Parma, 1995.
- (7) *Cronaca senese di Donato di Neri e di suo figlio Neri*, in *Cronache senesi*, a cura di Alessandro Linsi e Fabio Iacometti, «Rerum Italicarum Scriptores», seconda ed., t. XV, parte VI, Bologna, 1931-1939, pp. 567-685.
- (8) Giovanni Serracambi, *Le croniche*, a cura di Salvatore Bonghi, 3 voll., Lucca, 1892.
- (9) フルクハルト『イタリヤ・ルネサンスの文化』(上) 中公文庫、一九七四年、一三三頁。
- (10) Emil Werunsky, *Der erste Romanzug Kaiser Karl IV. (1354/1355)*, Innsbruck, 1878. カルメンスキの弟子でオーストリアのオーストリアが旅行した二回目のローマを扱った研究を発表している。Gustav Pirchan, *Italien und Kaiser Karl IV. in der Zeit seiner zweiten Romfahrt*, 2 voll., Prag, 1930.
- (11) Ellen Widder, *Itinerar und Politik. Studien zur Reichsherrschaft Karls IV. südlich der Alpen*, Köln-Weimar-Wien, 1993.

- (12) Roland Pauler, *La signoria dell'imperatore. Pisa e l'impero al tempo di Carlo IV (1354-1369)*, Pisa, 1995, 1d., *Die deutschen Könige und Italien im 14. Jahrhundert. Von Heinrich VII. bis Karl IV.*, Darmstadt, 1997.
- (13) Goffredo Marchinelli, *Carlo IV di Lussemburgo e la repubblica di Pisa*, «Studi storici», 15 (1906), pp. 313-365, 445-502.
- (14) Mauro Ronzani, *L'imperatore come signore della città: l'esperienza pisana da Arrigo VII a Carlo IV in Le signorie cittadine in Toscana. Esperienze di potere e forme di governo personale (secoli VII-XV)*, a cura di Andrea Zorzi, Roma, 2013, pp. 121-148.
- (15) ロッシはシエナにおける政権の崩壊についてカールの意図的な介入があったと考えているが、この説は受け入れられてはいる。Pietro Rossi, *Carlo IV di Lussemburgo e la repubblica di Siena (1355-1369)*, «Bullettino senese di storia patria», n.s., 1 (1930), pp. 5-39, 178-242; cfr., William M. Bowsky, *A Medieval Italian Commune: Siena under the Nine, 1287-1355*, Berkeley, 1981, p. 299, n. 1.
- (16) カールのイタリヤ都市への入市式については、シエナタカシエナの事例を検討している。Gerrit Jasper Schenk, *Enter the Emperor: Charles IV and Siena between Politics, Diplomacy, and Ritual (1355 and 1368)*, in *Beyond the Palio: Urbanism and Ritual in Renaissance Siena*, ed. by Philippa Jackson and Fabrizio Nevola, Malden, Mass., 2006, pp. 25-43.
- (17) Sardo, *Cronaca di Pisa*, pp. 99-136.
- (18) *Ibid.*, pp. 167-192.
- (19) 「メッセル」は写本製作者による表記で、サルドは「メッセル」と記している。Banti, *Introduzione*, p. LIX. ただし「メッセル」はなるべく「殿」と訳すようにした。